

重点 目標	自己評価					備考	
	評価項目	具体的取組	評価指標	評価：達成度判断基準	取組の状況・結果		達成状況
学び づくり	総合的な学 力の向上	<ul style="list-style-type: none"> 学力調査の結果を分析して定着していない内容を授業や朝学習で補強する。 授業での学んだ知識や言語力を活用して思考、判断し表現する活動場面の設定。 国語検定、算数検定の取組 	【成果指標】 各種・学力調査の結果が県及び国の平均を上回っている。	全国学力学習状況調査・市学力調査の結果が全国平均、県基礎学力調査の結果が県平均を上回っている教科が全体の A: 80%以上 B: 75%以上 C: 50%以上 D: 50%未満	調査対象は11科目で、そのうち全国平均や県平均を上回っている科目は9科目で82%だった。学年問わず、学力が向上している。学力調査結果の分析や授業での姿から一人ひとりのつまづきを把握し、授業や朝学習で補強していく。	A	主担当:中谷 評価方法: 学力調査 評価実施時期: 8月, 1月
	学力向上プ ランの推進	<ul style="list-style-type: none"> 授業でリレートークによる対話場面の設定。 話し方、聞き方を各学級の実態に応じて指導する。 	【成果指標】 相手の話をしっかり聞いたり自分の考えを伝えたりすることができる力が児童に身に付いている。	学習アンケートで「みんなに聞こえる声で考えを伝える」という項目で肯定的な回答をした児童の割合が A: 95%以上 B: 85%以上 C: 75%以上 D: 75%未満	4月～7月のアンケートでは、肯定的な回答をした児童の割合は96%だった。自分の考えを最後まで言うことができている。授業中だけでなく、集会などでも感想をみんなに聞こえる声で伝えることができる。	A	主担当:中谷 評価方法: 児童に対する学習アンケート 評価実施時期: 7月, 1月
	GIGA スク ール構想の推 進	<ul style="list-style-type: none"> 週に一度、タイピングの技能を計測する時間を設ける。 休み時間や家庭学習等で、積極的にクロームブックを活用させる。 3年生については、ローマ字の学習の定着を図る。 	【成果指標】 児童にタイピングの技能が身に付いている。	タイピングのアプリを活用する。5分間で入力できる文字数の平均(3～6年)が A: 360文字以上 B: 330文字以上 C: 300文字以上 D: 300文字未満	文字数の平均は307文字だった。4月と比べて、ほとんどの児童のタイピング速度が上がっている(30文字程度増)。今後も、授業の中で、クロームブックを積極的に使っていく。	C	主担当:松本 評価方法:タイピングアプリ 評価実施時期: 7月, 1月
学び づくり	明るい挨拶 があふれる 学校づくり	<ul style="list-style-type: none"> 生活目標に挨拶に関する目標を決め、挨拶の習慣の定着を図る。 「あいさつ4つのコツ」を学級で指導し意識させる。 	【満足度指標】 児童がすすんで挨拶する習慣が身に付いている。	児童アンケートで「挨拶は、明るく、いつでも・どこでも・だれにでも、先にしている。」という項目で強肯定的な回答をした児童の割合が A: 児童の90%以上 B: 児童の80%以上 C: 児童の70%以上 D: 児童の70%未満	前期(7月)のアンケートで、強肯定的な回答をした児童の割合は74%だった。登校時の挨拶は明るく先に挨拶している。「グッドマナーキャンペーン」などの、あいさつ週間を通して、いつでも、どこでも、だれにでも進んで挨拶ができるように働きかけていく。	C	主担当:中村 評価方法: 児童アンケート 評価実施時期: 7月, 1月
	児童が相談 できる体制 の構築	<ul style="list-style-type: none"> スクールカウンセラーの個人面談を行う。 担任との個人面談を定期的に行う。 	【努力指標】 児童が相談できる機会を設けている。	月1回以上児童との面談を行ったクラスが A: 4学級 B: 3学級 C: 2学級 D: 2学級未満	全学級で月1回以上担任が児童との面談を行った。定期的な担任との面談以外に、スクールカウンセラーや担任以外との面談(上戸っ子面談)も行った。今後も継続して児童が相談できる機会を設けていく。	A	主担当:中村 評価方法:担任からの報告等 評価実施時期: 7月, 1月

重点 目標	自己評価						備考
	評価項目	具体的取り組み	評価指標	評価：達成度判断基準	取組の状況・結果	達成状況	
体づくり	体力の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・体育の授業で、毎時間3分間走に取り組む。 ・ゴールデンタイム等を通して、授業以外の時間にも、積極的に体を動かすことができるようにしていく。 	【成果指標】 体力テストで数値の低かった項目「20mシャトルラン」が県平均を上回っている。	「20mシャトルラン」において、県平均を突破した児童の割合が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	県平均を突破した児童の割合は62%だった。具体的取組の「3分間走」を継続していく。また、ゴールデンタイム等の運動機会を積極的につくっていく。	C	主担当:松本 評価方法: 20mシャトルラン 評価実施時期: 7月, 1月
	健康教育の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・毎月「元気アップカード」を行い、規則正しい生活習慣を身につけさせる。 ・早寝・早起きの大切さ、メディアの使用時間等について指導する。 ・朝ごはんの大切さや食事のマナー等の食育を行う。 	【満足度指標】 学校での指導や家庭での働きかけの結果、子ども達の生活習慣が向上している。	保護者アンケートの「早寝・早起き・朝ごはんが実行できている」という項目に肯定的に回答した保護者が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	早寝・早起き・朝ごはんが実行できていると回答した保護者は79%であった。児童アンケートでは100%であった。集団指導の継続、また生活面で気になる児童には個別指導を行なっていく。	C	主担当:上田 評価方法: 保護者アンケート 評価実施時期: 7月, 1月
絆づくり・開かれた学校	地域の教育力の活用	<ul style="list-style-type: none"> ・地域人材を活用し、地域の特色を生かした授業実践を行う。 	【努力指標】 生活科、総合的な学習、道徳などの授業やクラブ活動などで、地域の人材を活用する授業を行っている。	学期に1回以上行った学級が A: 4学級 B: 3学級 C: 2学級 D: 1学級	地域人材を活用した授業を行ったのは3学級だった。2学期にはゲストティーチャーを招いての授業を予定している。年間学習計画をもとに地域の特色を生かした授業づくりを進めていく。	B	主担当:梶 評価方法:担任からの報告等 評価実施時期: 7月, 1月
	学校情報の積極的な公開と家庭・地域への適切な説明	<ul style="list-style-type: none"> ・学校だよりや学級だよりの発行、ホームページの充実により、保護者が学校経営方針や教育内容を理解できるように努める。 	【満足度指標】 保護者が学校の教育方針や児童の様子が伝わっていると感じている。	保護者アンケートで「学校だより、学級だより、ホームページ等で児童の活動の様子が伝わりやすい。」に対し、肯定的な回答をした保護者の割合が、 A: 85%以上 B: 75%以上 C: 65%以上 D: 65%未満	保護者アンケートの結果は96%であった。昨年度よりわずかながら向上した。児童の活動の様子をタイムリーに発信していることが結果につながったと考える。今後も保護者への発信システム「スクリレ」も活用しながら、保護者の一層の理解を得るように努める。	A	主担当:三益 評価方法: 保護者アンケート 評価実施時期: 7月, 1月
人材育成・働き方改革	人材育成	<ul style="list-style-type: none"> ・若手を中心となって、職員全体で学ぶ機会を設定する。 ・日常的に、かつ月1回短時間でも設定し、授業や行事に生かす。夏季休業中に、若手主催で研修会を実施する。 	【満足度指標】 若手教員早期育成プログラムの研修により、職員が指導力や・授業力が向上したと感じている。	教職員アンケートで「校内研修や若プロで、指導力・授業力が向上した」に対し、肯定的な回答をした教職員の割合が、 A: 100% B: 75% C: 50% D: 25%未満	アンケートの結果は肯定的回答が100%だった。若手職員のニーズを把握しながら、タイムリーな内容を取り上げてきた成果である。後期は他校と連携したり、若手主催の研修会を実施したりする。後期は「とてもそう思う」が100%となることを目指す。	A	主担当:梶 評価方法: 実施回数 評価実施時期: 7月, 1月
	働き方改革の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・校務分掌の平準化と担当の明確化を図り、意識改革を推進する。 ・業務改善のための会議を定期的に開催する。 ・校務支援システムの活用による業務改善を増やす。 	【成果指標】 教職員が働き方改革を意識して効率的に業務を行い、時間外勤務時間を削減している。	定時退校日を月に3回(第3水曜日、最終金曜日、マイ定時退校日)とし、定時退校日を3回以上取得した割合が、 A: 150%以上 B: 130%以上 C: 100%以上 D: 100%未満	定時退校日を月に3回以上取得した割合が158%であった。教職員が働き方改革を意識して効率的に業務を行っていることの現れである。ただし、厳密には17時頃の退校も定時とみなしている場合もあり、具体的取組の一層の定着を目指す。	A	主担当:三益 評価方法: 勤務時間記録表、職員アンケート 評価実施時期: 7月, 1月